

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11. 月光川

11- 1

北から西にかけて磐梯朝日国立公園のメインとなる朝日山地や月山などの山脈が連なっている西川町は、古くから月山と湯殿山参詣のために、行者や参拝客用の宿坊や旅館を営む宿泊業で成り立ってきた。

階下で自分の名前を繰り返す呼ぶ声に、真紀は目を覚ました。

慣れ親しんだヘッドで、セーターとジーンズ姿に着がえたまま寝入ってしまった真紀は、半覚醒状態で束の間どこにいるのか気づかなかった。

カーテンを開け放しておいた窓から、月山の上空に満天の星が輝いている。

真紀は急いで髪を梳かすと、足早に階下へ降りていった。

台所では、朝子と奈美恵が紅白歌合戦を見ながら、年越しそばの支度をしていた。

初出場の絢香がラブ・バラード『三日月』を歌っている。

.....

君がいない夜だって

そう no more cry もう泣かないよ

.....

「すっかり寝込んでしまっ—」と真紀は申し訳なさそうに言った。

「起きるまでそっとしておこうと思ったんだけど、一緒に年越しそばを食べれるなんて、これから先、あるかないか分からないので、声掛けすることにしたの」と朝子が手を休めずに言った。

「具材は茸と鴨です。泊りのお客様には山菜そばをお出ししたのですよ」と奈美恵は言って、義姉への心配りを表した。

「せわしい時にすみません。でも、とても嬉しいです。(寒なめこ)に(むきたけ)ですよね！」

「真紀さん、咄嗟に二種類の茸名を挙げられるだけでも西川町民の証よ」と朝子が言う。

「証と言えば、村山弁を話す人もいなくなったでしょう」と奈美恵が口を添えた。

「んだのよ～」と朝子が方言で合わせる。

「お姉さん、お箸ば揃えでけろ」と奈美恵は目尻を下げて言った。

「んだ！んだ！んだ！」と三人は交互に言い合いながら、同郷のよしみを楽しんだ。

テレビではTOKIOが『宙船』を歌っていた。